

は、幼児保育者の幼児保育者たる真諦は何なのであろうか。

前にしばしば、名画名音楽といったことから例をとる。レントンは名画を制作した芸術家であった。ベートーベンも音楽を作曲した芸術家であった。ただ絵描き、ただ作曲家ではない。芸術家であることが、その本質であったのである。勿論、絵と音楽とにおいて、その芸術性を發揮した。しかし、芸術家たることを例にとらないでも、芸術家が描いた絵だけが真の芸術であり、芸術家を作った作曲だけが真の芸術であることは論を俟たない。そこで、あなたは幼児保育者という人間芸術家である。人間を最も深いところ、最も純なところで相手とするものは皆人間芸術で

“幼児保育の芸術性”をめぐって

森田 宗一

いつも私が「いいなあ」と思いよく話すことは、しあわせ感に満ちたお母さんが「イナイイナイバー」と赤ちゃんをあやしている光景である。

お母さんは幼い子どもをみつめながら顔一ぱいに笑みをうか

あるが、他の場合は芸術的ただけには止まり得ないことが多々あるとしても、幼児を相手とする場合は、その芸術性は最も深いといえないかもしれないが、最も純なるものである。その最も純な芸術性が幼児保育の真諦であり、あなたの芸術性があなたを真に幼児保育者にするものであり、あなたはあなたの芸術性を以てこそ真に幼児保育者なのであると、こう答えても過言であるまい。少なくとも、あなたの保育を真にし大にし高貴にするものは、あなたの学問性、社会性、教育性のほかに、あなたの芸術性（ここでわたしの言う意味で）あらねばならない。

（昭和二十三年六月「幼児の教育」第四十七巻第六号）

べ、時には百面相しながら「イナイイナイバー」とやる。赤ちゃんはそれに応えて、顔を一ぱいに笑でうずめてニコニコキヤッキヤツとする。手も足も体全体を動かして笑う。その光景のなかに母と子のすばらしい人間的な出会いが、躍如としてるように思

う。
人間が最初に人間的な情緒やしぐさを学ぶのは、お母さんのお

乳をのみ、イナイイナイバーをしているころの母子関係の中にある。そのころの家庭においてである。まことに幼時における母子関係、そのころの家庭こそ、人間にとって最も大事な最初の学習である。だからそういう母子関係や家庭こそ、人生の最初学歴と呼ぶべきである。この最初学歴は一生人間につきまとい、最終学歴よりもはるかに重要なものである。ところがお母さんあるいは保育に当る人の心が心配ごとで一ぱいだったり、子どもとの出合いに不幸感を持っていたりすると、そのイナイイナイバーが自然でないのである。お母さんは無理になかば義務的にやるが、子どもは笑わない。顔をゆがめてニガ笑いしても全身で笑わないのだ。お母さんのイナイイナイバーには、リズムがない。情緒を動かす力がない。いわば芸術性がないのである。

またお母さんや保育者が自然を見、花を觀賞し、ああ美しいなあと感動し、小鳥や虫を愛し、その生命の不思議に感動する心が豊かであると、それはすぐ幼い子どもの情緒の肌に影響する。ところがお母さんが、物事に感動する心がなく、かたい雑な感覚しかない、それもそのまま子どもの心に影を残し、あとで取りのぞくことが困難になる。

青少年期や成人になって、いろんな問題行動にはしり、人間関係の感覚が悪く人とうまくいかなかったり、物事に感動する大切

な心の乏しいことなど、その生活歴をさかのぼってみると、幼いころの母子関係、保育の関係に問題のあるものが多い。人間の芸術性を培うには、大きくなってピアノを習わせたり油絵をかかせたりすることよりも、幼時における情緒豊かな母と子のふれ合い、その間柄がはるかに大切である。その一番つよい影響力は家庭のふん囲気であり、母親の心情なのである。

子どもは一歳ぐらいになると、母親から一歩二歩と離れ、自分の二本の足で立って歩き、手を使うようになる。この瞬間こそまさにほんとの人類の誕生といってよい。人間はほかの動物と比べて一年ばかり早産しているという（ポルトマン博士）。何のために早産しているのか。母のもとで人間性の基本、情緒の基本を学び身につけるためであるという。

歩き始めたころの子どもの姿を見ると、ほんとにはほえましく感動的なものである。「山のあなたの空遠く幸い住むと人のいう」という有名なカール・ブッセの詩を連想させるすばらしい子どもの前向きの姿である。自分の足で立って空が見え山の向うを見ようとして進み、手をふり手で物をつかもうとする。草花にさわり小虫や小動物とたわむれるのを楽しみ、やがてその手で、絵を書き、ものをつくることに興味をつよくする。そういう時の子どもは、ほんとにうれしそうだし幸福そうである。人間の文

化の初まりの太古の時代をも連想させる。人生において芸術性はまことに重大なものだが、一歳ころから二、三歳ごろの子どもの自然とのふれ合いの中に、大きな力が秘められている。そういう時の保育者（母もしくはそれに代る人）の心情や子どもの扱い方がまたきわめて重要なことなのである。

このごろの世の中は、右のようなことに無感覚で無惨に子どもから奪ってしまっている。ほんとう心ないことだ。そして母も保育者もそれに狎れてしまっている。子どもから自然や遊びを奪うことは、結局人間性をこわしてしまふことになる。子どもの心の感動やリズムをそこなってしまうからである。このごろの保育は、そういう子どもの心を大事に保ち育てていくことでなく、何かの中に捕へこみ押しこんでしまふ保育に墮している。したがって教育も、教える育てることではなく、狂育になってしまっているのではないかと思う。

さて、倉橋先生の「幼児保育の芸術性」を読みかえして新しい感動を覚える。そこにはほんとうの幼児保育の真諦が美しく述べられている。保育は大人の思い通りに保育したり単に保護したりすることでない。幼児の育つ力から発するリズムを育てること、つまり芸術性によるものだという。そしてそれは愛ということだ。『愛こそ最も高貴な、美しい人間芸術なのである』。『芸術性の

ない保育のなんと幼児につまらない不幸なことである』といわれる。

私もこのごろしみじみ思う。真の保育は子どもの本性のリズムと感動をひき出す芸術にほかならない。そして感動とリズムをもって幼児に接する保育者と幼子とのいきいきした出会いの中に、子どもはすくすく育っていく。そのこと自体が何ものにもまさる芸術なのだ。

川崎 千束

子どもの心は常に動いている。

動いているからこそ、ときとすると、あるものに向かって、ひたむきになれるのである。

平安の昔でも、さすがに清少納言は、この子どもの心理を次のように描写している。

二つ三つばかりなるちこの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵ありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらえて、大人などに見せたる、いとうつくし。

今も昔も、子どもの本源の心理は変わらないのであるが、子どもの心をどう捉え、どう扱っていくかが、現代的な解釈とし